

終業式講話

次のエピソードを聞いてほしい。何か変に思うだろうか。

父親と息子が交通事故に遭った。父親は亡くなり息子も大けがを負い、救急車で病院に搬送された。運び込まれた男の子を見た瞬間、外科医が思わず叫び声を上げた。「この子供は私の息子だ。」

3月9日(土)から1年生39人が米国研修へ向かい、15日(金)の夜無事に帰ってきた。13日(水)一行は国連本部を見学した。その当日第68回国連女性の地位委員会が、開催されていた。本年も日本政府代表団が結成され、日本からは、外務省、内閣府、厚労省、文科省、NGO代表、ユース代表が参加している。今年は、「ジェンダーの視点からの貧困撲滅、機構強化、資金動員によるジェンダー平等達成と女性・女兒のエンパワーメントの加速」をテーマに、一般討論、閣僚級円卓会合、インタラクティブ・ダイアログ等が行われている。

世界中でジェンダーの平等が叫ばれ、真剣に取り組まれているが、日本でもそうなっているとは私にはあまり思えない。

英経済誌「エコノミスト」3月7日国際女性デーにあわせて、OECD加盟国29か国を対象にした、女性の働きやすさランキングを発表した。日本は下から3番目の27位だった。1位アイスランド、2位スウェーデン、3位ノルウェー、4位フィンランドと北欧諸国が上位に入った。日本よりも下の順位の国は、28位トルコ、29位韓国だった。同誌によると、「韓国、日本、トルコの女性は依然として職場で最大の障害に直面している」と論評。

このような状況が世界に公開されることは日本にとって大きな損失だ。

これは海外の例だが、ある研究によると

- ・男性はグループディスカッションで6倍もの影響力を持っている
- ・70%の男性が、まったく同じ目標を達成した女性よりも男性を高く評価する
- ・女性がグループの40%を占めていても、男性と同じ承認を得る可能性は半分で、中断される可能性ははるかに高い
- ・報道などで、男性は女性よりも3倍引用される可能性が高く、映画の主人公になる可能性が2倍高い

アメリカのオーケストラの演奏家の採用試験に関する有名な研究がある。米国の有名オーケストラの演奏家の採用者の女性の割合は、女性比率は約5%であったという。しかし、採用試験で演奏者の性別も含めて誰かわからない状態(ブラインド・オーディション)で行うよ

うになると、現在は 35%以上になっている。明確な実力差によって判断すべき職種であっても、候補者の性別がわかる場合には、男性を採用する比率が高かったのだ。

ザビーネ・マイヤーという女性クラリネット奏者がいる。1981 年、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団の首席クラリネット奏者のオーディションを受けた。当時はベルリンフィルには女性の団員はいなかった。当時の指揮者だったカラヤンは、彼女の入団を望んだが、楽団員は猛反対した。理由は「彼女の音色には、厚みと融合性が欠如している」
彼女は、この件でかえって有名になり、世界中で活躍するようになった。

父親と息子が交通事故に遭った。父親は亡くなり息子も大けがを負い、救急車で病院に搬送された。運び込まれた男の子を見た瞬間、外科医が思わず叫び声を上げた。「この子供は私の息子だ。」この話を聞くと、自分も「外科医は男性」というバイアスを持っていることに気づかされる人が多い。

アンゲラ・メルケルは 2005 年から 16 年間にわたって、ドイツの首相を務めた。メルケル首相は 2015 年に起きた欧州難民危機に際して、シリア内戦を逃れてヨーロッパに入ろうとする難民たちを、他国が強制送還といった措置をとりはじめても、国内への受け入れを続けた。ドイツ国内には賛成派と反対派が厳しい対立を見せたが、結局 100 万人もの難民を受け入れた。世界中の尊敬を集める 21 世紀を代表する政治家だろう。

彼女が何かの折に「そのような政策をとったとき、これから新興して力をつけてくるだろう国々が、あのような国になりたいと、思ってくれるでしょうか」と言ったのが忘れられない。日本は豊かな国だといわれるが、もしそうなら、「日本のような国になりたい」と思わせるような、そのような国づくりを目指すことも我々の使命なのではないか。

自国の国民の平和と繁栄を企図するだけでなく、他国の範となるような国を目指すことも、将来、よりよい世界を築くために必要な視点ではないか。